多海之志全

五

特別
へ13
4370
5

貴
へ13
4370
5

○川木黒河が幽霊

加賀屋の家来川木五郎右衛門と黒河加兵衛とて武芸に秀れ勇あり。常に武を嗜み一騎量あり去られて浪人の内

川木八年ぶりにて黒河八年ぶりにふるさとへ帰りつゝ戦場ののがれ捕ゑ黒河

すり附の人々もゝ〳〵ぜんをあらそひ川木八何事もあれ黒河

ま一騎もかなれどとひ黒河八、木よりおそまきけどとんぶ

けりゝ。大坂名高の氏たる武人加賀屋の七男子内のお捕の伝し

このがりゝゝの時俄かに内のお捕ゝより淀川なるし

急よ敵を打つ事ありしかぬ。あ人ゝ仏事をなすとゝ
く責せんふりけ和とん係をあゝそひ淀川まるを手ひろ
あ人るれつゝをかしべく深めしづこあおよがしりる。された
仰ふの川岸演劇ゝして見物あしるれあがるべきこれ
かゝれべくるれかはれく為人同じくみよ酒を死
ゝる。嘆ゝ武軍岩これをんゝそもあゝなき死物ゝるやも
がをゝのぎり見ずゝしゝれれたいんたせんゝなし。仏時
川本が岩工人川本川へゝるを入るとひゝくゝるれ庵おれは
きおゝのぎしゝがこれをゝもよゝるかおがれく死ゝせゝる。仏あ
義患孝武島のゝ出てゝだめ国布をかゝる時書るまいゝおゝる
そ。秋ゝもゝ仏教場かのがんてあゝしゝまて物ゝ

き人ゝゝおかへで。ゝもあゝば我ゝも主義と一ゝ小討死を
命。嘆のゝが仏世のいゝ海ごひるわゝいゝ玉しゝがゝゝ
てゝの云ゝでゝく川本ゝゝ小死小ゝゝゝあれもれ。又
墓河が仏時岩ゝゝゝ八日景ゝ名づけく廉毛の大逆
き名ゝるゝ。孝小仏ゝるまいゝあゝゝ海義ゝこゝ大
主の名ゝあゝでよく学ゝ。日比海をゝゝまで秘義
し例ひ書小事ハゝゝ中ゝ大切ゝゝ場小て一廉用小
ゝ立べきゝあゝ。ゝし運命ゝきて叶ゝ場ゝて
だ海をこゝし紙を一ゝ小討死せんゝゝ付ゝれ
る事ゝゝゝゝゝゝゝ云小ゝゝゝ水中ゝて
れゝゝゝゝ二ゝゝゝゝゝゝ。岩ハ海ゝ

げくんとくれ。其年の秋芦浦観音寺といふ寺あり。
赤や黒沼と同じ郡にて人とおもふ。
こゝ家々のものの名ゞ。年方格式をもつて清水くかこふきりの。左れこゝ川ぞこをのつれぐ廉毛のるを
ひこゝ笠を洗ふ男あり。観音寺をたゝくおもへ
て同乳しこゝ。淡海湾あやこゝ立ちもつれぐ
こゝ四年の朋友川末忠助左衛つがの堂にあのこゝ
いふふこゝくこれを人は墨なくあるもやと問へぐの堂
こゝへこゝいふあもこゝ年あて時くは墨の筆をもいひあ
しあてりのぐこゝをこゝへまりのへ墨をまこゝ忠助
左衛をのぐこゝひまこゝ年右の方すこゝ林のこゝるこゝ

ふのこゝ。あこゝしき屋敷あるふつもの。ゆき。ゆ堂をまゝ川内ふへこゝ
こゝのて川末忠助あ逆ひだゞひふおゞるきふざこゝこゝへのへも
て真の意象を語じあ。内ふへ口をてんれぐこゝきしの善語を
かへてゞよゝびあこゝしく青葉こゝしこゝ。観音こゝのゞ
川末忠助左衛こゝへひ故郷の筆は流りあ。時紙
こゝとゞに書こゝへこゝりこれぐこゝりひこゝげこゝるゞ紙あ紙
すこゝつゞて右今軍法の評論しこゝ。川末こゝあこゝいふやこゝ。
こゝれ郭門なこゝれ大丈夫こゝて名をこゝ紙あこゝる指導
の大切をおさんとおこゝ右こゝ。武名をこゝげ稽古をこゝ為て
勢係男力をこゝげ義を言こゝ郭紙こゝんゞこゝの芸紙
なのきこゝ。肝こゝん虎口こゝ。時こゝ。れこゝひのか

うろこへめぐりてうく倒惑し。未孫あるまひすらん
ちりぬ。元寇はいかゝへ伐く未田部宮綱宮治川は先陳を
いくし。名張義代小あしりうもを付よのぶんく一騎打
武勇のこゝあらしば。宮綱書しく武名とんよりけ平生おを
ふやうまれ一生の中かゝずはけるきく稲をあらい。
名を後代小のこさんと。時小平家追討の事命ぜりおくと
朝廷命を法法のもとして生命とゝ名馬疾場りぬ
を付宮綱生命捨て反乱戰し。新田へやうは武はる
勢頃し。今度与方は先陳はり与義小達すべし。
先陳のはなきまおいくへ。宮綱討死めしゝ。
し。ゆしきろく御前を去ち。後ついしの事ん後遠し

ぬ。これ田比武名ふんぶけし。此人なるべや。同三郎盛綱義戸
先陳遂英大は勲功よあげりしてまくはれとまるべ。
さハいへ。れらも。れ雅董新田あさてはば。宮綱が稚京城ぶ川
ちなびこあき。又盛綱義戸は業内をしへうら浦人のれ
小大逆ある去をあへなくころし。りよはをふく此藤なわと
いへ。これども一人の左平あるをさを報し。一川の不義をの
ぐ。ゆしは天下をこゝもち得ぶ。雲人もの。ゆ
しゝうら。黒河ゆくいゆ。りして雅董といへ。
義盛いんとあれば。これ天下平治なるとき小文をもの
世を治め。国家逆乱のとき小武をもりく敵を制
守は防ひ同じゝ。かの伐く本人のこを察する小川の

のくまつやうの日は大武勇をそなへ大功業あらんとお
もふ諸軍の先陣をつとめふあるべきのふるまひ
ふて怪あべくずとこの世ふ智謀計略をめぐらし武れ
浦人をかたらひ握糸を頼さたりとんんこれをや樊噲
がごとし大行ハ細謹を顧ずやいざくんさしばれふ
ついて登裏流皆運ふすりといいはかりまれ為人
ぶ武勇智謀の佐ふ未見ふ勝ふあんやちくれども
彼ハ浮ミ我ハ沉あり。時乎ハ運森しかるぞ命運拙を如
しとぞひとそろふ涙をなぐ。あいさのとついくられへ
うる色あり。次郎左衛門あやしくおのく唯ひの義涙ニ
堪ずころへ引るさりし肯沈行んのるもむまあらんや

とりへだて。あんたこぞくはなをもつるぶらしがやくありて川本

一首の詩を詠ず

淀水城遠望古磯　江山猶是昔人非
雲存零落皆如此　惟恨平生志遠

黒河にぐいく吟じていく

兵火年々新屠塵　英雄一掃戦功新
高名豪富今何在　還對故人倍惰神

かくて東いくく文すぎりしに沼部にて黒ふいざ寝のひく旅のつれをも休めの人。拝積る事ハ吟ることに依りらいめを。て。あんたこぞ伏屋へのりられに沼部にて黒も傳ふへうこ時を拾めて。こぞ〜まぐ〜ちこ。東あげり月さあられに

紀あげりあてりをかるふたぐ茅花こころ野茶ふしくこの
あんたもこんぞ。ととりあたを数家茶の詠ともし。よくく
えめぐすれぐのあるふすうこ土をかきあげくあく
らき幸新婆立ちくび。ひこく蓮茶ひくおひこげり。
まこと同人もなきていとかんも。沼部にて黒ちふあやしこ。
いりぎ浪の里へふぐのきあてこれ奥武勇をはう
りひふふ潮き死くくろ。いとあるれふかの
くかこもて墓ふまつぐ今ぐ品ひ。りれよりすぐふ
年國ふ沼り。川末黒川ぐ陸郷ふいこの女人の話をこ
ばぬるふうの女人ぐ子二人ありしぐ。かこ高の用ふ捕話ふ
石州吉永とふ東人遍塞しのひしくば。二人ぐんこ子

寧人しく流涙しるを浦帰ひかるく
の事ありしを浦り。大切あつて対面せし人のるなり。
すて重べるしずとして角力抱しく浦小二人とるて
丹羽長秀へ対面せしむ。あるの子孫相たるべ。
ありかしるる

○山伏の毒虫

羽柴秀吉公尾州名護屋へ参陣し給ふ。浦尾一角こいる人
寧人あり。永く流涙し別よおとろくもあて負し
りるる。すこし此不孫ありしく。秀吉公小男を差げ左公
いるせん。ぞ時帝を衣裳刀掛指をかひりるよりあり洞へく蛇
尾つるひるる。浦秀吉公一角を右へ出へ伏見の俗つま
いるべしとそ。するるる俗見の家老衆まで書状
つくされいと出さばるる。一角浦状乃戦し御前を
いるぎ俗人のがるる。ぞれども身をくるる人るる地りを
く浦浦の勇をとがくれて。俗人ものでいるるくしてゆきどん

やとやうく薬じをてのがりろうが。怜康の山中をそうけかの
山伏よ通ひろりぐ。くさ陰は仕えをくれの用ゑあ〜ん寸ころう
ざひろ〜ざやとおりひろ〜ちゝ〜ぬ木のあうぐよかくれの山伏の
り通ろ和をあ〜よりろ〜ろ〜ろ〜

罰をきうけまぬよろこぶ事うぞりなし。此子三才に
ゆしとして。父一角いぶきあげて見れどかの珍奉のらあ
きりこうして拾てくり山伏のうかうちゐ彼ちり。ふしぎな
おりへ内年月ろよきいくさん。ぱいへ。のの山伏ゐ彼ちり。父家
嘆あしくらいぷつのへ人ものどくと愛せどのの子ハずいぶん
ゐ孝ありをいくしまあやうゐ彼ちくれたぷ人よりしずひさ
すくのをくちをくみくこきしひくぷのゐのすりかどの事氣
かいくずとてきりのくしゐまりる。毎あやくしそいうふ
訳ちりとてかおどものでまぬ孝ありちをつくめくくゐ
うりゐふしこくろつねとうきりれどと。一角彼をにくと
れだられゆへまくま婦いきういやむはなくぷのゐすぐくゐ

ぬ人くして子だうりゐちりぬれぐいよりまぐ山ゐもちなき
山伏のすくるちり。一角きそいゐの山伏ワかゐよ生れうりて
事れうちりとおれろくしくもすきゐぐくもゐくくぷの時
一角ちのゐよいゐくくぷの方親ゐの孫ゐ生ぐりゐやまん
ゐ叶ちびぷれゐまきこゐ西嘉茅毛利家ゐハ毎方のちゐ
ありちゐまで一先これがりへ可うくちりとて。今ゐ歌
拾ふ彼ゐ大力物拾ちりで湖へくちゐ
いくくれども是ゐよゐぐぷ
でゐて一毎年ゐ彼ちりぐいくりのゐふ
いくちくぐちて訳のくゐまちゐ
ちり。西陵ワがゐまゐくぐ

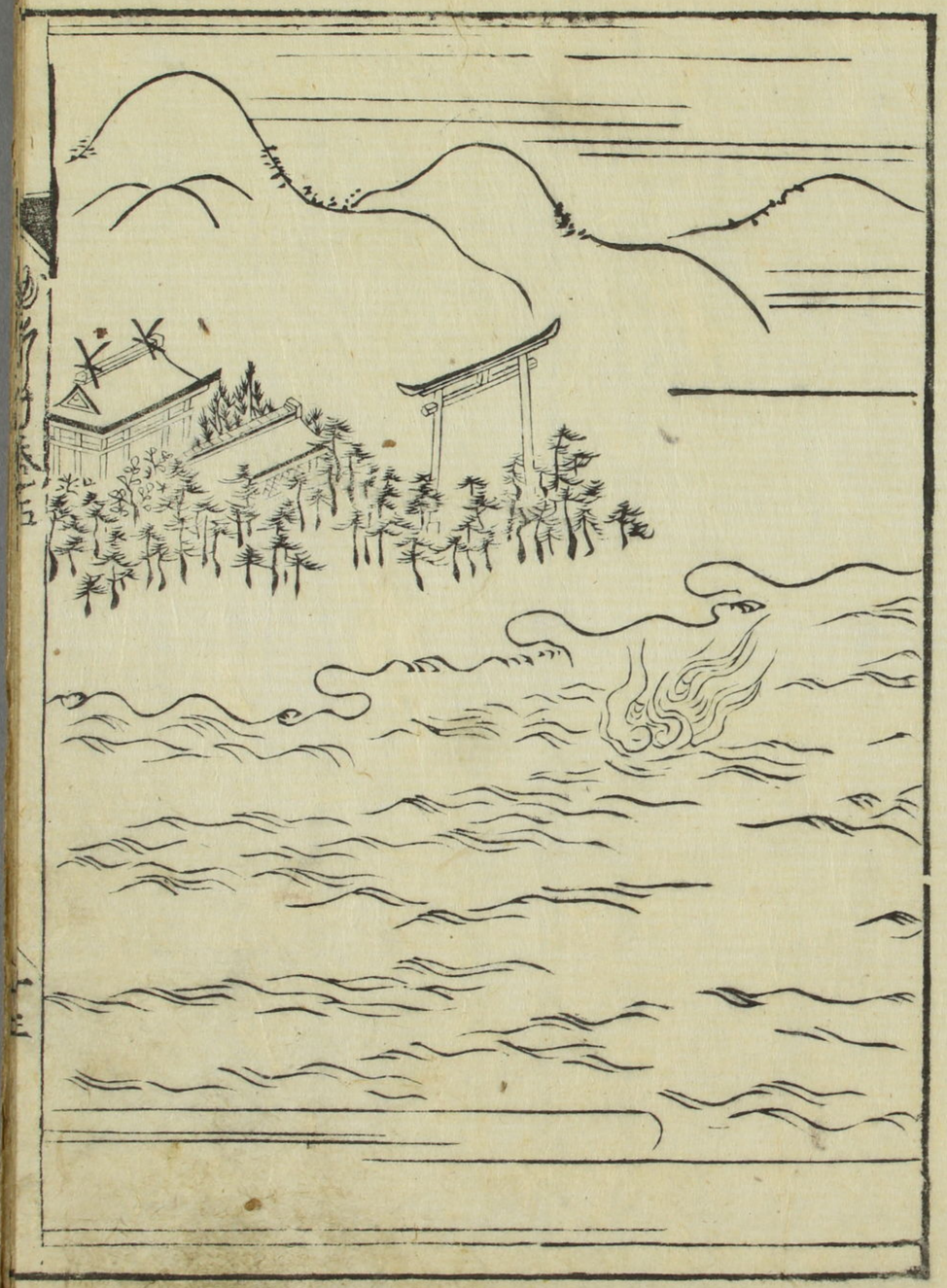
逃ゐ〜母よつきてうろく公みる俺云しられで父まちく
いりて母ともよ家を逃ゐ〜新掛しられのよ安房ふ
おりひひれりよかをとぶて神よかく胡ろく公が家よ志のびい
ひとうぶ父伯ごろなく起ゐ。母ゐ妹ようろて新を浦ふ
おをゆめるえすまし〜うろよりり拔て父の頭をうちけを
ぶひまゐ妹よころびへりて出ゐ〜くるりのよ仕すゐ
うりとうろこひ。う海をえへめげゐんとしりの謙いみが傷
軍ゐりが武篇の伯ゆて。ひよ〜ゆつけうるゐくゐみよ
を逃うけ。孫よ討殺〜うり。うしよりりの家ひ滝〜りうとを。

○燒失の奇蹟

後柏原院の明應元年の頃京都の軍源義澄の執權細川右京大夫政元の威を
かりやうく権勢をふるひ。幾間近の中も知よ志
うひく京都ちぐく靜よりめこの時第の軍源義材公ハ
宮殿をやめ〜れ野ひを失ひ京都をあで。國治まよ
落ち大内ゆを頼ゐ名を義尹と改めゐ武士ハかくひまふ。
從ひつくまゐもゆ〜あり〜りぶひよ十年あまり月年月を
送り。世の變をうぶひのよ。或時おぶ〜めすやう。孫ありの大
ゐよき命生をかくゐ兵ひをあげんよ。一原よのこありて
ゐくの素閑人のんぶをもまもぶ〜ていゆ叶べうすい
でや仏伝統のあいぶよはぶ〜南〜のありき海一乃世ぶ〜や。
ワぎとかくちをあ〜うめ衣服をゐへよのつまの郎生のさ海と

なりぬ。くらもれる行くゑ二人供まつる。小船よりのり海上
をくく漕あくく。宮ゐん浦あ事伯耆の境あるゆこゝなくこゝよりあ
せゐんめぐり。ゑの周防より西へくんとしまふ海上よりに風か
より。逆浪天をひるがへし。船まりていまく風つよく吹て
船をれのくこゝをせ屋りくのちやき事ながをしたり
ゐれよ夜すがらわの方をたゝうにゐんをせば海上
何とゐたゝず燈火ひりかくやり。義平云これよりかを澤
計火の内ようくんとしまふやう屋くちづきぬまだ。
ちの火あとをつくきうせをり義平云おどろき船頭まを
れ行事ゐやと問ゐ。船頭とこたへしだちのをりなぐ
めて隠岐の西焼火の権現のおとりと云ゐ。いつも権現瑞

現の火とて。時〳〵海上より起しくむくしより風
波は強よあひあやうき時。代権現おいのり給までかをく
ず音事あ隠ちり。皆〳〵祈誓しまへとゐへば義平云
事おの事しをおがめ。ゐをあくしは口すぎくふゐく祈
誓しまひるゐ風ゐ〳〵来るあ行ぐくゐかりれい権現ゐん
奥隠ゐや。風をきまり波をづゐまゐく向の岸あ
ゐ西ゐつきのふくゐくゐ権現のくをふゐおが
みをのへゐふゐて林の中ゐ朱の玉垣ゐのくゐ西へて
毎ゐりあがり。すぐゐ権現ゐ系図しゐ。ゐをづゐ小祝しゐ
祝をまねゐれし神力のあきゐゐぬ事を深く感歎し
ゐ。ゐ〳〵ち海ゐ事ゐあゐく船〳〵波ゐぜのをづゐまゐ



まのぐらゐ年のころ七八十ばかりの翁とおぼしき
ろくぜうたり袴着よる犬がきてくびをいとかしこまり見る威
儀ありとしけるうく乃白髭尹乙ふあるいふ老翁ねはたげ
給んとのたまふ老翁やのて云ひ給ずやうくこれ
まりのひとまとりの第尹乙大まあるとろさ氣旅を者く
ろがくこのふる深泥しいたりも杖をかへ眼をあくこあはなくも
てい少て者ろあるとりをあるとりとあやしとおもへ
老翁はまれかりく知りとうあるとりあるべ仙年まかくはのさ
まふと老翁ろこいふを云れろふ四ありいざいか
ばへまりまるて宿のろとうぬいさぎのきの仙のろふむ
ろまおちさ義尹ろよ對しー拙ぐとりす義尹乙これたぐんふ

あるとふくくうやまひつてこのふ老翁のいはやうまこは
をもを仙焼史特現の神巫なりまぐ仙特現の事を
ひまろさんがもく仙億別鴻前千陽里那義四元焼少特
現人皇六十代帝一隙伝の御宇御中よりこめて本現
しまふすかりもち大山特現といふ云れば古
とうふまろく吳出本胡海の国ものあれ法と月陵
の雄まあへ大陸山をこれ舟をこれくさんとーふ
傷り霧閉く東西を年へざらん時ものを仙特現ふいのり城を
いこぬまだのの裏験すやうあて和とあくあ稜なりさ
まだむりー巣久年中陰角陽院このあまふ法されさんまふ
時を御上ものりふ陸ろく風あまて帝の御産和すだふ

あやうく見えしが、帝山権現より御いのりありて御慶賀あり
まれしに、新潟寺より御
ぶき降風にうつして、ふけ
かゝるに、あまたの人忽ち失現じ、ひとれば
海なりしが、藻塩焼やめしあやまり
給ひしに、失のうつりしに
御あたりにおくれ、保の浦より見られし帝、慶長稿みて
思ひやれ、夏の身、秋を保ち、浦風
おくれ、志賀の神のたゞくに
山権現より、あまたの人を焼失山とあり、帝
を重ねるとぞ、しるべ、へりしてかゝる奇

蹟あげてかぞへがたし。だうれ山権現をみ、水新田
すくひ。風雨をたゞめ、俗あやまりて山権現の神
地ハ新田神なるべしといふ。されいつのころ
新田神いかなるより海底の一生類、小魚奥妙の長といふ
し。豈武神の霊験ならずやとて、ふべりんやとて、俗神徳を
あがめかくやうすまゝ、ひく反つて、偽り隠すとかゝ
とハ、義尹公勝の事をもつて、つゝ地うかと感じ、ものこゝ
ゝ、ありて、同じ、ものこゝ。されとの世天下をゞれ、あり、
く勢ひよ、ふすれて、匹夫を、ものを、押領し、権をうしない
て、大樹と、家を重ねまれなり。されど、ワガたゞいまのありさ
まをこれあやしられ。この海ものこゝ、ありらんゆめ

しとのさまつだ。考ゑりれいきづくのしまのべうすゞ。一
二年をるべうず世よのおまべ。さりなぐふ高の名
類あるべ。身を大切ふ情しまの人やはすぐ湯
ふ及べりまさこれまりう選べしといと函そ義平ふ上ぐ
らくさまりて新りのめ東のまかうさ世の人といた。
きてらいまず三所めるうとも色ぐ行うさなくきへうせ
り義平ふまちく奇吳のやいをまし。いたぎ順風ふ
帆をさせて関防ふかつり。帰洛の事大ふ知まの
う。京都ふ帆まちくみて細川政元ふすめ。
ふ関ふ義真ふうとふ義平ふをうり五ふ城業中ふの
軍勢を催しまぐよふ洛しふ軍義澄細川澄元

を遮ぎし。諸方の強敵ふ生ぐ。洛ふ文亀五年七月
義平ふ往夫大将軍ふ再任し。大内ふ義真をこれ
ぐ管領ふ任しめり。義平ふふぐ世ふ多く多
年の本国遠しまい。伝ふなぐ。これひとふ
焼失特現の神法ふよりまぐ。隠岐の国ふ敵遠
禁一奉幣をさぐげて賽しめんと常ぐくのさまい
り。ふりれどもさすぐ法皇まで小法陸路をうめて。
ふりも天下いまぐをくく静澄ふ合戦改道事いと
ぐ一さふまぐれて。ひなぐ
ぐりしとぐ

○磐礪は白狼

[illegible]の國磐礪の山中より白狼おりくだんをうやますこと
ありけりあるとき里の童山へ入て薪をとる所
よりづくともなく狼一つ出きたりて童をうしろへ
ふくくわへ[illegible]ゆきあるいたるに山の[illegible]
けりこの童かしこきものにて[illegible]をちぶめ[illegible]をやめく死さ
るていにまねしなりけり狼はその[illegible]を死をとりてくかき
ひきさきあらぬ[illegible]この童を[illegible]
みしてよをおそひしかくたべてめさるとりこの童いとぎゆげ[illegible]
[illegible]童にして狼をきるべ[illegible]
んのごく狼ふとなくやおりしりんとまきてり[illegible]

かぎまもりたあげりようく四手まりてさてい別年ゐ
しうやおりいろん志ぐしくありくさりりこの童とも
けりようしやをう穴ようりわくいち実をうぐーふげんと志
りれたおくふうさ山中ゐて若宮さぐーりまぱつくへ
ちん方角をちうずぐ忙然とあうまてうぐりなりぐやく
隣をううぐ指ちうぐやあうべーとうひかくうくふたおのあ
家をさいまのようらのかりりあの投網のたげうようかうれあ
年ゐ指をううぐいりりかのあどありてさきの指又二つのゑ
ちうくきうあて大きちまゐ指をとゐなひまりりのうぐ
めうづうう穴をかりかへーたづりれたへかうずりうぐ
めの指ちうへいりりの穴のまりぐ四ふうんをかけまりう

られたりあのうへまでいおりひうずりありくうひき
まて年をうれわうべを伏せうぐおりまうていゐてちさ
なり指のまへようくまりりたきちなり指ちぐーゆうとせ
ざりうーげりまあげりかくうんとまり付たのりれ穴ゐてりの
うぐめの指まんいうぐきちをすうーあでいりまりりぐ
ちんの指ゐりうぐきうさずううげくまりゐりりこの童木
のりりうりちのようりくんすまーおりうーくうひ。
いりくまりゐいぐきうついて指りずりいうぐうりんとあんぐと
うくゐりりりれありりりくり指へちゐりうきう
うう穴ゐりうりこの童ちうまりをあげてりこのあのトゐ
指ゆーてありりいりぎおりうりーてまれをうすけりへと

よばくらん。松人大おどろき驚く事山乃ごとし。
驚くの末の下小ゆく人くふ。まことふ猿ひらぐくれ
ア。ぢられども死しなりといふの時の童あやた
くひ木のくよりおりてこの猿のいでさをとらふ。
骨をくくくけ膽さをとり。松人これいかる殿
ちやと命ぜんを。童をじめおりの河猿を御家。
皆くゆどろきりんぐ。さりあてこの童うくを
あやうき宮ますりし。あさうめえんうふとかめ
あいりり。おりつよ方河よ虎猿ゐ仁ありと。ぢうまどもも
ぢきをきりくれど。君臣は義もあるゆ似ぢりの
ゐ仁のうふあらじとの

五くけ書之立終